わが郷土を語る（その２５）

中尾　佐之吉

手がとどかなかった「新聞」

私は、朝起きると先ず新聞を見る。それが日課である。したがって、新聞の来ない日はさびしい。もう新聞の無い生活は考えられない。このように、きっても切れない関係の新聞も、ながい付合いかというとそうとも言えないのである。勿論、昭和のはじめころからわが家に入っているから、三半世紀以上の付合いと言うことになるが、新聞そのものは一世紀以上前から、岡山でも発行されていたのである。そこで、わが家になぜ新聞が届かなかったか、というより、なぜ新聞が購えなかったかを考えてみることにする。

岡山では、明治１２年（1879）１月「山陽新報」（現在の山陽新聞の前身）の第１号が発行されている。当時の新聞は紙面の大きさが、タテ１尺４寸・ヨコ７寸３分（約３６×２５㎝）で、タブロイド版より小さく、現在の新聞の半分くらいだったとか。そして、新聞一枚の値段は、１銭５厘（１か月前金の場合は３２銭、市外は郵送料が１か月２５銭加算）である。

新聞代で、たった１銭５厘かと思われるかもしれないが、当時の警察官（巡査）の初任給が月額４円（蓬郷　巌著「岡山県庁ものがたり」による）だったということだから、新聞代が月３２銭とてしも、月給の８％にあたる。

現在の新聞は、朝刊で２４頁から３２頁建の組版で、しかも一部１００円くらいだ。情報量も多くなっているが、広告のスペースも多いためで、このため、日給１万円の労働者でも新聞代は給料の１％に過ぎない。当時の新聞代が相対的にいかに高価なものであったかが知られよう。この地方の農家では、当然に手が出せる状況でなかったことはいうまでもない。

そればかりでなく、「御一新」と言うことで諸制度はもとより、世の中の事情がどんどん変わってゆくので、田舎者にとっては、いままでの常識は役にたたず、新聞の高級な論説は理解できなかったということもあろう。とにかく、新聞は縁なき存在だったと思う。

明治２５年（1892）７月には、岡山にさらに山陽新報のライバル社として「中国民報社」が生まれる。そして、それから「山陽」・「中民」の両紙が社運をかけて、よい意味での競争をするようになる。したがって、どちらもよい新聞を出そうと苦心し、購読者を増やそうと努力するので、発行部数は急速に増えたようである。とくに日露戦争が始まると、戦況ニュースに関心が高まり購読者が急増して、明治３９年には、山陽新報の発行部数も４万を越すほどになったという。（注１）

大正１２年の関東大震災は、特大ニュースになったと思うが、新聞のないわが家では、当時それについての話はなかった。その頃には、田中野田でも医師をしておられた原　正雄先生宅や他に数軒のお家に新聞をとつておられたのではないかと思われるので、関東大震災は大きな話題になった筈だと思うのだが、私にはとんと記憶がないのである。もっとも、それは私の６才の頃だったから、大人の話はわからなかったのかも知れない。

大正１１年か１２年頃には、私の家でも自転車を買っている。アメリカ製で価格も１００円だったと聞いている。（注２）また、大正１３年頃、和気岩夫さんが石油発動機や関連機器を田中野田で初めて買われた。（その後この地区で石油発動機が急速に普及するのだが…このことはすでに書いた）自転車にしても発動機にしても、生活に便利で仕事の能率があがるとなると、“金のことは言うておれん、道具を買ってやらないと若い者が働かんようになる„という時代になってきた。

そして大正１４年（1925）、普通選挙法が成立して２５才以上の男子に衆議院議員の選挙権が与えられた。そうなると、皆が政治に関心を持つようになる。わしは政友会が好きだ、わしは民政党を応援するぞという声もでる。山陽（山陽新報）は政友会系じゃ、中民（中国民報）は民政党系じゃそうなとか、いろんなうわさが流れたりする。新聞社もここぞとばかり、あの手この手で購読者の拡張にのりだす。あの家にとれば自分の家にもというようになって昭和の初め頃には大抵の家に新聞を買うようになった。文明開花の余恵が半世紀にしてようやくこの地方におとずれたことになる。

昭和１１年には当局の勧奨で、山陽新報と中国民報は合併して、名前も、「山陽中国合同新聞」となつた。戦後、合同新聞を「山陽新聞」に改め今日に至っている。現在、同社の新聞の発行部数は４０万部を越えているそうだ。

新聞は社会の木鐸といわれているが、新聞業界も時代の移り変わりを反映して動いているのである。

注１　山陽新報の創刊時の発行部数は６００とか、また、明治３７年に１万部を突破したという。（岡　長平著「岡山始まり物語」による）

注２　当時の１００円を米の値段で現在の価格に換算すると、およそ２０万円くらいになる。いまの高級自動２輪車なみである。

なお、自転車による新聞配達は、明治３３年に始まっているが、その自転車もアメリカ製で一台が１７３円（現在の私の推定価格で約４０万円）であったと、「岡山始まり物語」に書かれている。

春の公園清掃

「いいかげんは駄目よ」

和気　正明

町内のことに関係してないことを“ふれあい新聞”に書こうとしており申し訳ございませんが最近私が思案していることです。

物事をはっきり白か黒か○か×のように決めていくのは、西洋的というか理系的考え方といえそうです。

言葉をもて遊ぶことになりますが「いいかげんは駄目よ」と言われます。荷造りのロープを「いいかげん」にかければ荷は崩れてしまい、窓ガラスを「いいかげん」に拭けば、塵が拭かれて白い線となり前より見えにくくなってしまいます。「いいかげんは駄目よ」できっちりと白か黒にしなければなりません。

ところが、何でもきっちりするのはよくなく、あまりこだわらない「いいかげんがいいよ」とも言われます。お風呂の湯も「いいかげんがいいに決まっています。何でも灰色のように中間的、中庸あるいはファジイに見ることが、こだわらないよい考えのようにみえそうです。

白黒つけたがいいのか灰色で中間的なのがいいのか決めるには、その場その場の状況がよく理解できる必要があり、頭は軟らかで身体は臨機応変に動かねばなりません。

先日庭木虫取りの消毒薬を噴霧しました。母が言うには亡き父は丁寧に二度がけぐらいしていましたが、私の散布は誠にもって「いいかげん」なものであったようです。「いいかげん」な噴霧では殺虫効果はないそうです。

周囲の状況がよく分かったり、どういった方法をとるのがよりよいのか判断するのは頭ですから、頭を軟らかくしておく必要があります。又何かにこだわろうとする性格も軟らかくしておく必要もありそうです。

「いいかげんがよい」のか「いいかげんは駄目よ」なのか、何か簡単に決められる原則があったらよいのになあと思っております。

編集後記

今頃町内のあちこちにきれいに乱れ咲いた花を見かけます。四季を通して町内を花で飾ることは至難なことでありますが、一時期だけでも花いっぱい運動を呼びかけたらという有り難い声も耳にします。

すでにこの新聞でも紹介しましたように、笹が瀬川の堤防のほとりに毎年美しい花を咲かせて、登下校の子供達の心にうるおいを与えているグループがあります。またポットや畑などにスミレやサルビアなどをみごとに咲かせて、道行く人を楽しませてくれている家があります。家の周りの少しの空間も惜しんで花を育て、自他共に楽しめるふんいきをつくっていきましょう。

原・和気